

お忙しくても、約 2 分間で読めます

ハートフル・ワード (心からの言葉)

山内公認会計士事務所

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

スモールマネジメントへ回帰 遠藤 功 (早稲田大学ビジネススクール教授、ローランド・ベルダー会長)

1. 日本の是元の「競争力」とはいったい何だろうか。そのヒントという出来事が 3 月 24 日に日本の二連覇で幕を閉じた WBC (ワールド・ベースボール・クラシック) にあった。マスコミは、この勝利を「スモールベースボール」の勝利と伝えた。犠打やエンドラン、盗塁や進塁打など、足と小技を絡めた野球のことで、機動性を生かした「きめ細かい」野球が勝利したということだ。ここでいう「スモール」とは、一般的にイメージされる「小さい」「力がない」というネガティブな意味ではない。むしろ「きめ細かい」「精微」と捉えるべきものである。
2. じつは経営においても、同じようなストーリーが成り立つのではないかと思う。つまり、「スモール」で「きめ細かい」経営が、欧米企業の「ビツク」で「ダイナミック」な経営に対して十二分に対抗できる理念となる。強い競争力をもちうる、ということだ。これまで日本企業の特徴は「制約」「緻密」「連続」の三つのキーワードで成り立っている。第一に「制約」。日本は限られた小さな島国である。土地、天然資源にしても有限ということだ。皆で知恵を絞り新しいアイデアを次から次に考え出してきた。第二のキーワードは「緻密」。限られたスペースで天然資源のなかで、小さなことに目配りしながら、こつこつ忍耐強く機能、技術を磨き上げてきた。第三のキーワードは「連続」。この連続性は「人づくり」という側面において欠かせない。人は簡単に育つものではない。連続を担保するためには、長期雇用が決して否定できない。
3. つまり、サブプライム大不況によって、自らの「足下の競争力」を問うべき今こそ、日本企業は自らの「立ち位置」を再確認し、「きめ細かい経営」すなわち「スモールマネジメント」に回帰すべきなのだ。

(参考:「Voice」2009年7月号)

経営者のための理念・哲学

社会貢献できる企業が残る

武田 国男 (武田薬品工業会長)

1. 会社の原理原則というのは、社会が自分たちに何を求めているのか、自分たちの使命は何であるのか、それをいつも頭の中に置きながら、目標に向かって、一步一步地道な努力をしていくことです。それが、事業の発展、企業の成長にもつながる。
2. 半年先も読めないと思慮経営者が多いですが、目先のカネに目的がすり替えられていると思います。カネが目的になってしまいますと、恣意的に無理をしたり、人をだましたり、そういうもので利益を上げようとする。それに手を染めると、成功が慢心を呼び、どうしても抜けられなくなる。
3. 前は「一円でも儲けたれ」と思いましたけど、今は社会貢献できる企業が残っていくと思います。そこを狙って会社をつくり上げていきたい。

(参考:「週刊ダイヤモンド」:2009年4月11日号)

街の活性化策

町民のアイデアで持続可能な町へ

1. 北海道下川町の安齋保町長は、「永久に持続可能な事業を目指している。大きな成長は見込めないし、昔の活気も取り戻せはしない。でも無理に企業誘致するよりも、身の丈に合った活気を維持する方が現実的だ」。そんな方針だから街の財政状況も悪くない。テーマパークや映画祭など新たな観光資源を作ろうと巨額融資してつまずく地方都市は少なくないが、下川町はそうはしない。2つある観光の目玉は、いずれも真正正銘の手作りだ。
2. 町の一部を取り囲む石の城壁「万里長城」は、町民や来訪者に手で石を運んでもらい 14 年かけて築いた。自分が運んだ石に名前が彫って残せるのが人気を呼び、築城には全国から 12 万人が参加したという。このアイデアも町民や町職員が考えたものだ。基幹産業を失い、交通手段も消え、人口はピーク時の 1 万 5000 人から 4000 人まで減った下川町。だが、単なる過疎の町と違い、将来も生き残る町だと思えるビジョンがある。

(参考:「日経ビジネス」2009年4月6日号)

古典に学ぶ

人間形成の三大要素

「人間というものは、これを大きく分けると、だいたい血、育ち及び教えという三つの要素からできると言えましょう。血というのは血統のことであり、育ちというのはその人の生き立ちを言うわけですから。そして教えというのは、家庭における躾以外の、一個の人格に接することによって与えられる心の光を言うわけですから」

(参考:森信三「修身教授録抄」:致知出版社)